

美術授業に カメラ

題材名『トリックアート』
第1学年4組37名

平成20年6月
東京都大田区立南六郷中学校
佐藤真理子教諭の授業

APA社団法人
日本広告写真家協会
出版情報事業部
『美術授業にカメラ』の実践記録です。
企画編集 鈴木英雄

ねらい

○自分の作品をテーマに写真を撮ること
とて、作品のよさやおもしろさに気づいたり、作品を写真にしたときの意外性や、更に作品として残すおもしろさを味わう。
○トリックアートを制作した時の自分の意図に合わせて、より効果的な表現ができるように工夫して写真を撮ること
とで、「作品の見せ方」という点で多様な表現を発見する。

題材について

本題材は「そっくり描こう！トリックアート」というテーマで、狭い美術室の中ではあるが、生徒が描きたい場所を選び、そこに自由な発想でトリックを設定して画用紙に描いたものを、写真にするという表現活動である。描いた作品を写真にすることで完成する。生徒はカメラの経験はあっても、自分の作品を写真にすることは少ないと考える。画像の中で、どのように自分の作品が写り、存在するのか新鮮な感覚を味わわせたい。その中には、壁、床、黒板、洗剤、ヤカン、窓、水道の蛇口や流し等があり、汚れや古い傷なども追求してみようという意識させた。しかし、「そっくり」を意識しつつも生徒なりの印象を大事にし、さらにトリックを加えることで1年生らしいアイデアが飛び出し、楽しく気持ちの入った制作活動ができた。ものをじっくりと見つめ、

第一段階

1 カメラの使い方を学ぶ
トリックアートの仕上げということを意識させ、トリックとしての効果をねらって写真を撮るよう促す。

2 作品を自分のトリックを設定した場所に貼り付け、写真撮影をする。
作品（画用紙）を貼り付ける方法をアドバイスする。

3 撮影した友達作品を何点かスクリーンで見ながら、より効果的な撮り方を学ぶ。
効果的なトリックに見えるようにどの配置や角度、距離から撮るとよいのか考えさせる。

第二段階
1 選択した作品を何点かスクリーンで鑑賞する。
工夫した点に着目させる。

佐藤真理子教諭談

たくさんの選択肢がある中で、その一場面を選んでシャッターを押す。その動作は一瞬ではあるが、いろいろな能力を使う。授業で子どもの様子を見ながら、場面を選び、自分の作品が「どう写るか」を考え、「うん、こーだ」と決めるまでの流れに、明らかに「決定力」が必要なのだと感じた。そして、自分の意図したものが、どう写るかを想定することから「想像力」が必要とされ、そこからドキドキ感が生まれる。ブレてはいけないという撮る時の緊張感、おもしろさへと変わる。
授業では、子どもにとって写真は撮るという行為が、記録写真ではなく、頑張った仕上げた「トリックア

ート作品」を撮影することで、ぬくもりのある第二の美術作品として生かされるようにねらいを定めてみた。生徒はトリックとして考えられる場所を選び、子どもらしいユニークで、意外な世界を創り出そうと制作した。それを写真にして鑑賞することで、更に想像の世界を拡げることができたのではないだろうか。



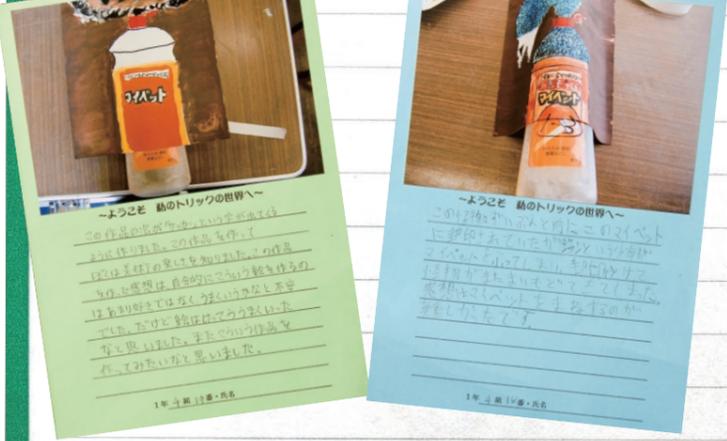
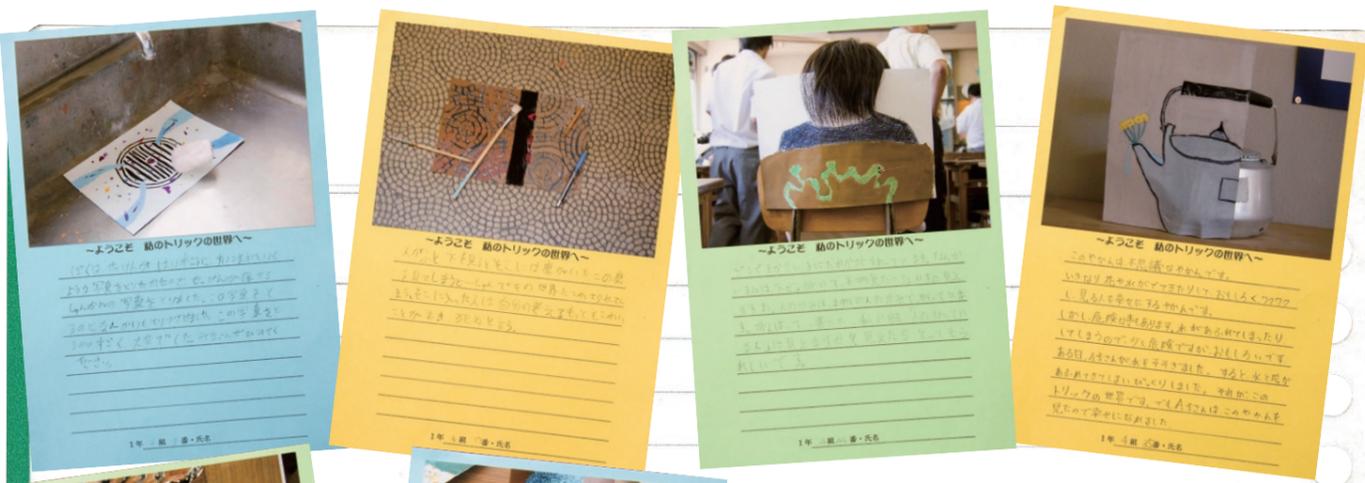
熱心にカメラ操作を学ぶ生徒達。

写真/城ノ下俊治・田中充



思いもよらない生徒達の発想力に驚く。

自分の思い通りになる「絵」と「実物」を組み合わせる。



文章をつけることで一つの物語が完成する。

